

2018年1月21日川越教会

心の安らぐ日を

加藤 享

[聖書] マルコによる福音書3章1～6節

イエスはまた会堂にお入りになった。そこに片手の萎えた人がいた。人々はイエスを訴えようと思って、安息日にこの人の病気をいやされるかどうか、注目していた。イエスは手の萎えた人に、「真ん中に立ちなさい」と言われた。そして人々にこう言われた。「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」彼らは黙っていた。

そこで、イエスは怒って人々を見回し、彼らのかたくなな心を悲しみながら、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。伸ばすと、手は元どおりになった。ファリサイ派の人々は出て行き、早速、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを殺そうかと相談し始めた。

[序] 安息日をめぐる衝突

イスラエルの民は、紀元前13世紀頃にモーセに率いられてエジプトから脱出して、約束の地カナンに戻ってきました。そして神から与えられた**律法**を厳格に守ることで、**神の民**として訓練され、小国ながらも周囲の民に打ち勝つ民族に成長していきました。それが**モーセの十戒**です。

その十戒の第四が**安息日規定**です。「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、**七日目は、あなたの神、主の安息日**であるから、**いかなる仕事もしてはならない**。あなたも息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。六日の間に主は、天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、**七日目に休まれた**から、主は安息日を祝福して聖別されたのである。」(出エジプト20:10)

ユダヤ人はこの安息日規定を、神から選ばれた民に与えられた**祝福のしるし**だと受け取りました。そこで「だれでも安息日に仕事をする者は必ず死刑に処せられる」(31:15)という規定を作り、どんなことがあっても**安息日を厳守する気風**が生まれたのです。

ところが今日の聖書のすぐ前、マルコ福音書2章の終りには、主イエスの弟子たちが、安息日に道を歩きながら畑の麦の穂を摘んで食べた記事が記されています。多分お腹が空いていたのでしょう。(2:23) 律法を厳格に守るファリ

サイ派の人々は、弟子たちの行為を**農作業の一種**だと決め付け、主イエスを問い詰めました。「御覧なさい。なぜ彼らは安息日には**してはならないことをする**のか」しかし主イエスは、彼らの抗議を意に介しませんでした。そして**安息日に、会堂の礼拝**に出席されたのです。

会衆の中に**片手が萎えた人**がいました。この男を主イエスがどう扱うか、人々は注目していました。イエスのことだから、恐らく彼を癒すでしょう。そうしたら**律法違反**でだと厳しく非難されるに違いありません。しかし主イエスは、その人をわざわざ**会堂の真ん中に立たせて**、萎えた手を元通りに癒して上げたのです。ファリサイ派の人々は早速会堂から出て行き、ヘロデ派の人々と一緒に、どのようにしてイエスを**死刑にするか**相談し始めました。

安息日を守ろうとする点で大変頑固な人々が集まっている礼拝の席上です。手の萎えた人をわざわざ真ん中に立たせて癒してしまわれたのですから、主イエスも**断固**とした決意をもって居られたことが分かります。ファリサイ派の**頑固**さと、イエス・キリストの**断固**とした決意とが、伝道の初期の段階で、早くも火花を散らしてぶつかり合ったのでした。

[1] 安息日の意義

では「**安息日を守る**」とは、もともとどういうことだったのでしょうか。それは神の素晴らしい**天地創造の御業**に基づいています。神は「混沌」と「闇」の中から、**第一の日に光**を創造し、**第二の日には大空**と創造の御業をすすめ、**第六の日に**、ご自分にかたどって**人間**をお造りになり、すべての生き物の管理をお委ねになりました。そして**第七の日に**は、創造の仕事を離れて**安息**なさり、こうして**天地創造の御業を完成**されたのでした。(創世記 1:1~2:3)

神がお造りになった**生き物**は、人間を含めて**みな非常に良いもの**でした。その証拠には、神はすべての生き物に、**食べ物**として**青草**を与えておられます。魚も鳥も動物・昆虫・爬虫類、また人間も、互いに殺し合い食い合うことをしない世界、弱肉強食ではなく、**共存共栄の世界**だったのです。その上で神はゆっくり休んで、**造られたもの全てを祝福**されたのでした。

私たちが働くと言う場合には、**作業をしている状態**だけを言います。それならば神の天地創造の作業も、**六日間**で終わったことになります。でも聖書は「**第七の日に、神は御自分の仕事を完成**された」と記述しています。ここに、その仕事によって生じた疲れを**休息**して癒し、元気を回復した時に**仕事が完成**

したことになるという考えがきちんと示されています。**仕事とは本来作業と休息とがセット**にされているものなのですね。

しかも安息日の規定は、主人とその家族だけでなく、牛・ろばなどの家畜や奴隷も他国からの労働者も、みな同じように休ませよと、命じています。それは、自分たちもかつてはエジプトの地で奴隷であったが、神の憐れみで救い出していただいたのだから、**今辛い立場にある者をいたわろう**というのです。安息日の戒めは、**いたわりに満ちた深い祝福の言葉**に他なりません。

[2] 安らいだ一日の大切さ

では祝福に満ちた**安息日の良い守り方**とはどのようなものなのでしょう。犬養道子が次のように書いていました。「汝、週の終わりの一日を聖なる日とせよ、安息の日とせよ——**安らいだ一日**を大切にする時、**人は真に人となる**。労働は尊く、良いものだ。しかし人の目は、時に**安らぎつつ**、いつもとは違う**はるかに美しいもの**、善きもの、真なるものに向けられねばならぬ。仕事にまけて、普段は出会うことの出来にくい親子、友人同士の**心と心の静かな語らい**、いつもはなおざりにしか見えていない空や樹や陽光や雨の滴りなどに、ふと思いをひかれて、そこに**無言歌を聞き**、詩を読む——それらすべては『**聖なる日**』に近い」（聖書の世界）

安らいだ一日を大切にする時、人は真に人となるであろう——何と素晴らしい言葉でしょうか。しかも自分だけでなく、家族や奴隷、家畜や他国人をも**大切に労わり**、皆で安らいだ一日を送る時、心と心の静かな語らいが生まれ、人はまさに**神の姿にかたどって造られた人間になる**のです。もしも安息日が、命あるもの全てと共に豊かな祝福をいただく日として、神が定められたのでしたら、**安息日を大切に**する人々からは、そのような**祝福が溢れ出て来る**はずではないでしょうか。

そして、腹を空かせて麦の穂を摘み始めた人を見かけたならば、何故そんな事を安息日にするのかと咎める前に、何か食べ物を与えようとするのではないのでしょうか。片手の萎えた人を使って主イエスを陥れようと企むよりも、**不自由な体**で生きなければならないその人の**悲しみや辛さ**を思いやっ、主イエスと一緒に、その人と共に安息日の**豊かな休息と喜び**とを分け合おうとするのではないのでしょうか。

創造の御業の完成!——それはこの片手の萎えた人にとっては、手が癒され、

再び両手を自由に使って働いて、神さまから与えられた役割を十分に果たすことが出来るようになることです。だから手を癒そうとした主イエスの方が、ファリサイ派の人よりも、**安息日の目的**を実現しようとしておられるのです。それなのに彼らは、主イエスを**殺そうとし始めた**のです。恐ろしい心の動きです。自分たちの**心の根本的な誤り**に、気が付かなくなっていたのです。悲しい**罪深さ**です。

[3] 魂の休息

主イエスとファリサイ派とが安息日をめぐり激しく対立したこの記事は、マタイ福音書では12章に記されています。そしてその直前の11章の終わりに、あの有名な主イエスの招きの言葉が記されています。「**疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである**」(マタイ11:28~30)

主イエスは「**貴方がたを休ませてあげよう**」とおっしゃりながら、人生の重荷を載せた車を引いて行くつらい歩みを、もうしなくてもよい、**くびきをはずして開放してあげよう**とは言っておられません。「**貴方のくびきを私のくびきと取り替えて、私に学びながら荷車を引いてごらん**」と言っておられるのです。私たちは重荷を背負って生きていく労苦から、解放されたいと願います。でも重荷を降ろして**身軽に生きる人生**などないのです。

「**私のくびきに代えてごらん。そして私に学びながら、もう一度荷物を担ぎ直してごらん。重荷を耐えられなくしているのは、くびきが体にピッタリ合っていないためではないか。働き続けよう。貴方の魂に本当の休み・平安が与えられるよ**」と、主イエスは語りかけておられるのです。靴が足に合わないと同様、痛くなって歩けません。それと同じです。

イエス・キリストのくびきは**柔和と謙遜のくびき**です。「柔和」の反対語は「荒い、怒った、闘争心、悪意」です。**荒々しさ**は心身をすぐに疲れさせます。柔和・優しさが**平和と安息**をもたらすのです。「謙遜」の反対語は「権力者、思い上がる者、富んでいる者」です。ですから謙遜は**神の力が働く低さ、弱さ**を言います。そうです。私たちの心が荒々しくなっているから、疲れるのです。誇り高ぶろうとあくせくするから、疲れるのです。

イエス・キリストはベツレヘムの馬小屋で誕生されました。最も貧しい誕生です。でも飼い葉桶に休む御子の笑顔には、平和と恵みの光が輝いていました。また子ろばの背中に乗ってエルサレムの都に入城し、「自分を救ってみろ」と口々に罵る人々のために「父よ、彼らをお赦してください」と祈りながら、私たち人間の罪の一切を我が身に引き受けて、十字架の上で贖いの死を遂げられました。イエス・キリストこそ、柔和と謙遜のくびきをつけて救い主の勤めを全うされたお方です。その柔和と謙遜のくびきをつけて、重荷を負う時に、私たちの魂にも本当の休息が与えられるのです。

【結】 真の安息日を持つ教会に

まだ小さい子ども 4 人を残して夫に先立たれた婦人が居ました。これからは父親・母親の二役を果たさなければなりません。葬儀が終わると懸命に働き始めました。一年経ってふと気がつく、子どもたちがとげとげしくなっています。ハッとさせられました。そこで休んでいた日曜の礼拝出席を復活させました。そして夕食の後片付けを済ますと、彼女はゆっくりした心で食卓に座り、編み物をし始めました。すると子どもたちが集まってきて、母親に身を寄せたり、そばの畳に寝そべて本を読んだり、食卓で勉強を始めたりし出したのです。母親のホッとする心の安らぎが、家族の和やかさを取り戻してくれたのでした。

神は、七日目に仕事を一切やめて安息する一日をお作りになりました。「安らいだ一日を大切に作る時、人は真に人となるであろう」と犬養道子は言っています。私たちは忙しく働く毎日から我が身を切り離して、全く違う日、安息日を持つ必要があります。普段は出会うことの出来にくい親と子、友人同士の心と心の静かな語り、空や樹や陽光や雨の滴りなどに、ふと思いをひかれて、そこに無言歌を聞く。そして自分が神によって造られた者であることを、神から繰り返し聞き直す必要があります。私は川越教会で礼拝を守る日曜日が、安息日の主イエスから、人を真の人にする安息を頂く日になって欲しいと願います。

本当に心の安らぐ安息日を持ちましょう。神は私たち一人ひとりを極めて良いものにお造りくださっているのです。その姿を取り戻して、私が真に人となる日を、七日目ごとに持つようにいたしましょう。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのくびきを負い、わたしに

学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」

私たちの**教会の礼拝と交わり**とが、このように呼びかけておられるイエス・キリストの言葉を聞き合う時となりますように。イエスさまから、柔和と謙遜のくびきをいただいて、**本当の安らぎ**を周りの者と分かち合いつつ、共に生きていく新しい一週間の第一日となるように、イエスさまの御霊を豊かに頂く**川越教会**にしていきたいと思います。

祈ります：神さま、あなたは天地万物を非常に良い物としてお創り下さいました。そして最後の一日をゆっくり休んで、創造の御業を完成されました。仕事とは、働きと休息がセットになっていること、安らぐ一日で人は真の人になっていくという言葉大切にしたいと思えます。イエスさま、あなたの謙遜と柔和のくびきを頂いて、人生の荷車を運ぶ者にして下さい。このようにあなたを礼拝する安息日を与えられましたことを感謝します。主よ、愛し合う者にして下さい。平和を創り出す者にして下さい。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン